

北陸大学ライブラリーセンター報

Bulletin NO.11

⇒をクリックすると本文がご覧になれます。

⇒ 愛読書、私の大切な本

園山 春一(外国語学部教授・エクステンションセンター長)

⇒ オランダ ユトレヒト大学ライブラリーを利用して
Utrecht University Library

古閑 健二郎(薬学部助手・薬博)

⇒ CLEVER HOUSEへ行こう!今日も明日も明後日も

山根 祥子(法学部2年生)

⇒ 心に響くもの

金井 宏一(外国語学部3年生)

⇒ 私の図書館利用法

清水 寛美(薬学研究科修士課程2年生)

⇒ 教育の課題

松本 和彦(法学部助教授)

⇒ <ギャラリーホール>

<Bulletin NO.12>

HOKURIKU UNIVERSITY LIBRARY CENTER

北陸大学ライブラリーセンター報
1st-Half 2001



愛読書、私の大切な本



園 山 春 一

趣味を聞かれると<読書>と答える人が多い。そのように答えた人の多くは格別な趣味を持っておらずなんとなく答えやすい無難なところで<読書>と答える人が多いのではないか。例えば、就職試験で趣味の欄に<読書>と書き、面接の時具体的な質問が面接官から出ると明解な答えが出来ず困った経験を持っている人が結構多いのではないかと思う。

実は、斯く言う私自身が40数年前の大学受験の時、当時はまだあった面接試験で、「君の趣味は？」と言う極くありふれた質問に、最もありふれた<読書>と答え、冷や汗と脂汗を流した経験をもっている。面接官の先生がどんな方かその時知る由もなく、その時読んでいた当時の新鋭フランス女流作家のフランソワーズ・サガンの『悲しみよこんにちは』を挙げたところ、先生はこの本を日本語に訳している最中であり、微に入り細にわたっての質問があり、かつこうよく原書を読んでいると言ってごまかすつもりを私をとっちめた。それ以来趣味と聞かれ<読書>と答えたことはない。

ところが、私自身は読書家であると自認し、本をこよなく愛している。

私をはじめ海外生活を体験したのは、中学生だった1954年〔昭和29年〕から5年間だが、この頃は第二次世界大戦が終わって10年くらいしか経っておらず、パリには日本人が子供も入れて55名、日本から送られる新聞は一週間遅れ、あるいは船便で一カ月かけての到着、いわんや週刊誌、月刊誌、単行本などは特別に日本に注文し、一カ月近くかけて落手する有様だった。その当時の情報の伝達、流れはこのようなのんびりしたもので、現在のE-MAILの時代では考えられない情報伝達のスピードだった。

しかし、いきなり海外生活を強いられた私は日本語以外知らない中学生であり、日本を離れる前に自分の好きな本をもって行こうと考えた。それが以下の3冊だった。

<次郎物語>、<アイヴァンホー>（スコット原作の騎士道物語）、<十五少年漂流記>（ジュール・ベルヌ原作）

そしてこの3冊の本を何回も何回も繰り返し読んだ。今でも、『十五少年漂流記』は一年に一度は読む絶対の愛読書だし、『アイヴァンホー』は、授業で参考文献として使用している。

この頃の日本はまだ帰国子女の受け入れ態勢が出来ておらず、帰国後日本で受験勉強をしていた学生と同じ入学試験を受験せざるを得ない制度のため、国語の試験のみならず、国語力がないと他の科目も合格できない試験方法であった。海外で中学・高校を過ごさざるを得ない子は大変大きなハンディキャップを背負っていたが、そのハンディ克服のため、私の場合、日本にいた祖母が毎月岩波文庫の文庫版の本を数冊船便で送ってくれていた。それを読んでは中学で一年間お世話になった日本にいる国語の先生に感想文を送り、国語力のアップをはかるように努めた。その経験は実に貴重なもので、それが私を本好きにした元だと思う。

私はアフリカの国々と接触する機会に恵まれてきたが、世界でもっとも貧しい地域に属するアフリカは現在でも一日働いても1\$しか稼げない国が30カ国近くあり、言語は1,000以上あるといわれているが、文字をもっている言語は数語しかなく、未だに初等教育の教科書でさえ外国語という国が大多数を占めている。世界には、アフリカのみならずアジア・中東・中南米などに同じような境遇に置かれた人がたくさんいる。この寄稿文を読まれる方で愛読家はたくさんいると思うが、アフリカなどの現状に思いをさせ日本語で好きな本を読んで知識を自由に吸収できる幸せを感じて貰いたい。

IT時代といわれ、本の価値や存在が薄れる中で、本を読む習慣を身に付けて貰いたいと切に願うものとして拙文を投稿した。

（外国語学部教授・エクステンションセンター長）



オランダ ユトレヒト大学ライブラリーを利用して Utrecht University Library

古 閑 健二郎

ユトレヒト大学ライブラリーは歴史の重み（過去）とデジタルテクノロジーによる運営（現在）をもとに、アカデミックで創造的な仕事を手がけられそうな感性（未来）へと結びつけさせる雰囲気をもつ。ユトレヒト大学には10のライブラリーがある。メインのセントラルライブラリーはユトレヒトセントラル駅東方向約700mに位置し、北陸大学ライブラリーセンターの約5倍の延べ面積を占めるコの字型の古い建物である。地球科学ライブラリー、Uithofライブラリー（宗教学、哲学、社会科学、地理学、教授法学）、FSBライブラリー（薬学、化学、生物学）、医学ライブラリー、獣医学ライブラリー、法学ライブラリー、美術学ライブラリー、自然科学・天文学ライブラリー及び数学・コンピュータ科学ライブラリーは同駅東方向約5 kmに位置する広大なキャンパス（約4平方km）に分散している。

まず、驚いたことは、このライブラリーの歴史である。1581年にユトレヒト市長の指示により国内各地から書籍が集められ、1584年に創設されたオランダで最初の公立図書館であったことである。ユトレヒト大学が創立された1636年にこの公立図書館はUtrecht University Libraryに改名され、現在に至っている。その当時に集められた書籍等は、現在もセントラルライブラリーにスペシャルコレクションとして保管されており、特別室にて閲覧できる。そのコレクションの中で820 - 835年に記された書籍が最も古く、その書籍の写真は館内で販売されている。また15世紀のオランダの図書も多くは、このセントラルライブラリーに保管されているとのことである。入口1階のフロアには、世界の辞典及び一般書籍が並べられてある。カウンター横の棚に英語で記された日本の辞典10冊ほどを見つけては思わず喜びを感じた。

薬学関係の書籍等のあるFSBライブラリーは、



薬学棟（9階建ての巨大なビル、左の平屋は実習棟）



Ad de Vriesライブラリー長とともに最新の定期刊行物前にて（右が筆者）

私が所属する薬学棟の隣のビルの2階にある。ゆったりした閲覧室には、約650タイトルの定期刊行物（学術雑誌）、専門の書籍及び資料が並べてある。もちろん検索等のできるLAN用のコンピュータも配置されている。

これら10のライブラリーにあるコレクション、辞典、書籍、資料、定期刊行物等の書誌事項の全て、一部の定期刊行物のフルテキスト及び書籍の概要はコンピュータに登録されており、イントラネット一部はインターネットを介して端末より検索、所在の確認、貸出の予約等ができるシステムになっている。また専門分野ごとに計約160のデータベースが作成されており、わかりやすく General、Humanities、Medical and Natural Sciences、Social and Behavioural Sciences及びLegal Sciencesに分けてある。これらのデータベースはLAN上、CD-ROM単独あるいはマイクロフィッシュによる情報提供としていつでも受けられることが可能になっている。

これほどの価値ある情報量をどのようにストック及び管理して、最新のテクノロジーを用い、情報をフローできるのはなぜだろうと疑問を感じたが、この疑問はすぐに解決された。なぜなら、これらライブラリーは、約400名のスタッフと約200名のサポーターにより運営されているからであった。学生総数23,000名に対してこの数は魅力的なものである。利用者側のニーズに応える機能を付加しては、より実用的な利便性を追求しているそうである。これらのライブラリーの利用の特典は、誰でも出入りし閲覧できること、また貸出を希望する場合には身分証明書をもとにIDカードを作成することで、学外の人でも自由に利用できることであり、実に嬉しい。これらライブラリーのオープニングタイムは、クリスマスホリデー（12月23日～1月1日）を除いて無休であり、平日は9時 - 23時、土曜日は9時 - 17時、日曜祝日は13時 - 17時まで（一部のライブラリーで閉館時間は異なる）である。この開かれたライブラリーは、年間約72万冊の貸出冊数を維持しながら運営されている。図書館のデジタル化も進めさせながらユーザーの期待に沿うライブラリーは真に魅力を感じるところであった。関心のある方は、ぜひユトレヒト大学ライブラリーのホームページ <http://www.library.uu.nl/> を開いてみてください。



セントラルライブラリー
スペシャルコレクション閲覧室



FSBライブラリーカウンター前

（薬学部助手・薬博）



CLEVER HOUSEへ行こう！ 今日も明日も明後日も

山根祥子

今日も図書館に足を運ぶ。もう私の日課になっている。自然と足が図書館へと向いてしまうのだ。なぜかわからない。私が図書館を好きな理由……静かだから？本が好きだから？いや、それだけではないはずだ。

あなたはCLEVER HOUSEに入って何か感じないだろうか。自動ドアが開くと優しく穏やかな気持ちになり、心身ともにリラックスしてくる……ここは木のぬくもりでいっぱいの空間なのだ。机、椅子、本棚そしてごみ箱に至るまで、目に映るものは可能な限り木製になっている。2、3階の閲覧席の窓側はカーブを描いた机になっていて、本棚の配置も弧を描いている。まるで大木の幹を思わせるような柱が中央に通っている。CLEVER HOUSEに存在するものは限りなく丸みを帯びていて、直線にはないあたたかさを感じる。さらに観葉植物や花などが所々に置かれているので、私達を心休ませてくれる環境は十分整っている。しかし、せっかくいい環境が提供されていても、それを利用しなければ宝の持ち腐れというものだ。人は何らかの刺激を与えられなければ成長しない。スポーツ選手がトレーニングをして筋肉を鍛えるように、私達はCLEVER HOUSEで読んだり、調べたり、書いたりしながら脳細胞を活性化することができる。

ところで、私は図書館でふっと手に取った本が案外興味深くて、よくその場で読みふけてしまう。気がつくと30分も立ち読みしていたことなど珍しくない。何か宝物でも探すようにわくわくしながら面白い本を見つけに行く。それは、本を読むことで先人のものの考え方や新しい見解に納得させられたり、また、私達の一生では到底経験できないようなことも活字を通して体験できるからだ。このような素晴らしい機会を与えてくれるのが図書館であり、私にはなくてはならない存在だ。

しかし、CLEVER HOUSEは本好きだけが集まる場所ではない。パソコンに触るだけ、新聞のテレビ欄しか見ない、試験勉強のときだけ利用する、そんな人がいてもいいのではないか？専門書、新聞、雑誌そしてパソコン。これらをどう活用するかは個人の自由であり、各々の知的好奇心が満足すればCLEVER HOUSEはその役割を果たしたと言えるからだ。ここに多くの人が集まり、互いに刺激し合いながら次第に学んでいくのが望ましい姿ではないかと思う。

さあ、あなたもCLEVER HOUSEへ行こう！今日も明日も明後日も……



(法学部 2年生)

心に響くもの

金井 宏 一



先日、風の音を聴いた。

私は春の青空を駆け抜けてゆく暖かい風が好きだ。

最近読んだ本の中に次のような一節があった。「自分の失敗や弱さに悩んでいる暇があるなら、今自分ができる全てのことをやりなさい。その人には人をうらやむ気持ちや、誰かに嫉妬する気持ちはなく、胸の中には五月の青空のようなすがすがしい気持ちが広がっている」

当たり前と感じる日常、ありふれたと感じてしまう心を吹き抜ける風がある。私にとって読書とはそういうものかもしれない。

私は尊敬する友達がいる。あの日、私は自分自身の弱さに絶望し何もかもがいやになっていた。その友達に電話した。彼は今から行くといった。そして彼は来た。友達4人を連れて。時計の針は12時を回っていた。2時間以上励まし続けてくれた。明日1時間目から講義があるのに。堅く絡まった糸がほどけていくような気持ちだった。全てを見せても一緒にいてくれる人がいることに気付いた。

「強く決意した者が勝つのだ。それなのに我々はあまりにも早く負けだと自分の心に言った。そして負けたのだ。」トルストイの言葉である。

「心こそ大切。心で負けない人が本当の勝利者です。何があっても心で負けなければ、たとえ失敗したとしても、その失敗を次につなげていける。悲しみや苦しみさえ自分の心を大きくする糧としていける。」これは私の人生における師匠である池田先生の言葉である。

若いころの失敗なんてたいしたことじゃないと私は思う。本当の失敗とは、失敗を恐れて何もしないことだ。

「友情は喜びを倍にし、悲しみを半分する。」(ドイツの詩人シラー) 私は立ち上がった。こんなにも支えてくれる人達がいる。私もみんなの力になりたいと思った。人の心を動かすのはやはり人の心だった。

友達も本も形こそ異なれ近いものを感じる。何故なら、本は人の心が至る所にちりばめられているから。ひとたびページをめくれば、ダンテやソクラテスとも語り合える。彼らが何に悩み、考え、どういった答えを見つけ出していったか、そこから学ぶことは多いと思う。私たちが現実の生活の中で、立ち止まった時、歩き出すための勇気をくれるかもしれないし、アドバイスをくれるかもしれない。

本は励ましてくれ、感動させてくれ、自分自身を高めてくれる。時には難しいことを言って悩ませてくれたりもするが。(笑)

私はクレバーが好きだ。特に4Fが好きだ。何故か。それは、4Fの眺めと4Fの本が好きだからである。勉強や読書の手を止めて、眼下に見える草や木に目を向けることも大切である。

本は私の心に語りかけ、心を動かし、より素敵な自分へと導いてくれる。そんな本とめぐり合ってきた。お気に入りの言葉を少し紹介してみよう。

「全力を尽くすのだ。それが君のすべてではないか。」(アメリカルネサンスの思想家エマソン)

「自分が自分に打ち勝つことが、すべての勝利の根本とも言うべき最善のことであり、自分が自分に負けるのは最も恥ずかしく、また、同時に最も悪いことだ。」(ギリシャの哲人プラトン)

「過ぎたことをくどくど言うのは愚の骨頂だ。我々は戦わなくちゃならん。より良い、遥かに良い暮らしを送らんがために。」(ロシアの文豪トルストイ)

最後に、ヘミングウェイの「誰がために鐘は鳴る」から、

「誰のために鐘は鳴っているのでしょうか。」「それは紛れもなく君のために鳴っているのだ。」

感想を聞かせていただけたら嬉しいです。キャンパス内で見かけたら、気軽に声をかけてください。素晴らしい機会を与えていただきまして、ありがとうございました。



(外国語学部 3年生)



私の図書館利用法

清水 寛美

私は、北陸大学薬学部の図書館にある黒いフレームに囲まれた小さな縦型の窓が好きです。それはあたかも一枚の額縁に飾られた絵を見る様です。特に机の高さから見える窓からの景色は、私にいろいろな考えを与えてくれています。

学部学生時代、私にとっての図書館とは、疑問点の解決とテスト勉強等々と達成感や充実感を得る場所であり、それらを納得し、やり遂げるまでの数えきれない図書選びと、それらを理解するのに費やされる、無駄と思えるほどの時間を過ごした場所でした。大学院生となった現在、私は「ある薬物の眠り・痛みのメカニズム」について研究をしていますが、その内容は奥深く「知りたい」と思う前に「知らなければならない」という時間が必要となります。そのため、図書館での困難な調べものの合間に、ふと外を眺めることがあるのです。そして「私は、今何を探したかったのだろう。」と研究を振り返ったり、「知識ばかり増やしても...。」と時間の無駄を感じたり、「このまま研究を続けてよいものなのか」と悩むことがあります。そのような時、私は図書館の小窓から外の景色を眺めることにしています。

私が図書館の小窓が好きな理由の一つに、「4年生の時の事を思い出させるきっかけづくりになる」ということがあります。それは、無我夢中で研究（今から想えば実習に毛がはえた程度のものですが）に没頭した頃の事と、短期間で強いられた眠りと戦いながらの定期試験や国家試験などの勉強の時の事です。手付かずの本に囲まれながら「眠りの研究をしてきて、今その眠りに悩まされながら勉強しなければいけないのか」という矛盾した思いに葛藤した日々は、苦い思い出ではありますが研究への興味を一層募らせるもので、研究への可能性を思い直す時となり、また研究を続けようと思う糧になっています。そして、私を大学院へ行こうと決心させたきっかけに、この小窓があったのだと思えます。

私には、図書館で一度も目を通したことのない本に囲まれるということは、私の知らない世界が大きく広がっているということで、夢が広がります。それを発見し、自己に取り入れられた時の嬉しさはどんな困難をも乗り越えられてきた自分の努力の賜物であると思えます。しかし研究という事柄に結論となるものはなく、これを続けるのにも何を探したら良いかさえも分からなくなる時があります。何に行きづまり、何に疑問を持ったら良いのかさえ分からなくなる事もあります。ですから、自分の研究への思いを再確認するために図書館という場所を選んでいきます。私にとって多くの本に囲まれながら「小さな窓から景色を見る」というものは、そう言うものなのです。

図書館とは静かな環境の中で安心感を得たり、沈黙の中で勉強をしたり、人生観を変える本との出会いがあったりと、人それぞれの利用の仕方があり、感じ方があると思います。そして、それにより興味を深める事となり、好奇心を満たす事となり、また目的を達成する事となり、充実感を得る場にもなり、過ごし方の目的はそれぞれが選択し、また得ているものも様々であると感じます。

「図書館は、本を選ぶだけの、勉強をするための場所ではない。」と私は感じます。これからも研究を通し、探究する楽しさ、疑問を解決していく嬉しさをこの図書館の小窓から見る景色を眺めながら実感し続けていきたいと思っています。



(薬学研究科修士課程 2年生)

教育の課題

松本和彦



大学の教員は、研究者であると同時に教育者でもある。研究者としては、それぞれの分野において第一線の研究成果を公表すべく努力することが職務である。これについてはあまり異論はないであろう。しかし、教育者としては何を為すべきか？これに関しては議論があると思われる。教育はどうあるべきか、と数人の学生に尋ねたことがある。知識や技術の教授にとどまらず、道徳的に正しい人間になるように導くことである、という意見があった。

カントの最晩年の著作に『教育学』（1803）がある。門弟リンクによって編集されたものだが、私が考えさせられたことの一つに次の一節がある。リンクによって付された編者注である。「本当に悪い人間、換言すれば、原則的に悪い人間は世の中には少ない。だが、これに反して、品性を失った人、あるいは、もっと正確に言えば、全然品性を持ったことのない人は多い。そして、そこから大部分の禍悪が生ずるのである。したがって、全ての教育学の主要課題は、名誉の概念ではなく、正義の概念に従って子どもを品性にまで陶冶することである。なぜなら名誉の概念は品性を排除するものであるから」。名誉や正義の概念とは何であろうか？リンクによれば、羞恥心に訴えるのではなく、それは実際にまた正しいのか、という疑問を子どもに常に喚起することである。個々の事例において「何が正しいのか？」については意見がわかれるところであろうが、「正しさとは何か？」について常に考える姿勢は重要である、と私も思う。

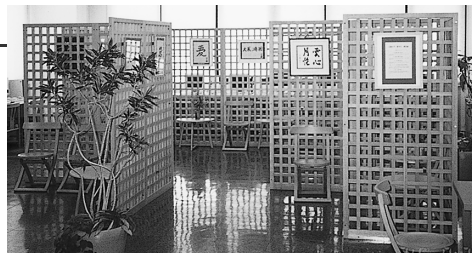
ところで問題なのは「品性とは何か」である。「道徳的教育における第一の努力は、品性を樹立することである」、とカントは述べているが、実践的教育の究極的目標は徳化にある。カントによれば、「品性とは格率に従って行為することに熟達していることである」。格率とは、各人が自らの行為の指針として自らに設定する規則を指す。したがって、「子どもは自分で正しいと認める格率に従って行為するようにならなくてはならない」。しかし、カントの道徳哲学によれば、人間が道徳的に行為しようとする限り、この格率が自分だけに通用する例外的なものであってはならず、常に誰にでも妥当する普遍的法則となることを意欲できるような格率に従って行為しなければならない。しかも、それが善であるという理由で、つまり、他の一切の動機をまじえず義務の概念から善を為すことが要請される。なぜなら、行為の全道徳的価値は善の格率に存するからである。だが、これは、子どもにあっては実現困難であり、道徳的陶冶は両親や教師の最大の見識が必要とされる、とカントは言う。

カントが子どもとして想定している年齢は、「人間が自分で自分を指導するよう自然そのものが規定した時期」すなわち約16歳までである。道徳教育が大学の教員の職務だと言えるかどうかについては議論の余地があるかもしれない。また仮に、職務であるとしてそれは可能であろうか？プラトンはその対話篇『メノン』において、「徳は教えるか」と自問しているが、必ずしも肯定的ではない。教師は道徳教育において、強要的であってはならず、また、学生は他律的であってはならない。学生は自己の責任において、自ら自己自身を教育すべきではあるまいか。

（法学部助教授）

ギャラリーホール 書道展

1月21日～2月28日までギャラリーホールにて、本学の留学生5名(14点)の書道展を開催しました。留学生の諸君はこれから進むべく「夢や希望」等を書にて表しました。



----- 出品者のプロフィール -----

- 銭 慧霞(セン スイカ) 法学部法律学科(中国)
- 陳 星暉(チン セイヨウ) 法学部法律学科(中国)
- 沈 娟(シン ケン) 法学部政治学科(中国)
- 江田 ブランドン 清(ゴウダ ブランドン キヨシ) 留学生別科(アメリカ)
- 劉 春(リュウ シュン) 留学生別科(中国)



法学部政治学科2年生 沈 娟(シン ケン)作「ふるさと」
故郷の家族を思いながら毎日勉学に励んでいます。



寄贈図書

本学の教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。ありがとうございました。

著 者	書 名	寄 贈 者
山本郁男	大麻の文化と科学	山本 郁男(薬学部教授)
佐野新一、蒲真理子	青年期からの健康・運動科学 改訂第2版	佐野 新一(外国語学部教授)
叶 秋男他	外国で暮らす	叶 秋男(法学部教授)

編集後記

新入生諸君、ご入学おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。本学で4年間勉学等に励む諸君を、ライブラリーセンターでは、精一杯支援していきたいと考えております。是非、有効に活用してください。

過日、昨年度の法学部の卒業生がライブラリーセンターにやってきました。約1年振りとのことで「懐かしい。クレパーハウスの木の温もりに触れると、心が落ち着く。」と改めて感激して帰りました。このような卒業生諸君の温かい言葉に接し、大変嬉しく思いました。

学生諸君、ライブラリーセンターの一層の活用をお願いいたします。

CONTENTS

- 愛読書、私の大切な本 1
- オランダ ユトレヒト大学ライブラリーを利用して
Utrecht University Library 2
- CLEVER HOUSEへ行く！
今日も明日も明後日も 4
- 心に響くもの 5
- 私の図書館利用法 6
- 教育の課題 7
- ギャラリーホール書道展 8
- 寄贈図書..... 8

北陸大学ライブラリーセンター報
NO.11 1st-Half 2001

平成13年4月10日発行

編集・発行：北陸大学ライブラリーセンター
〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1
TEL . 076-229-3021
FAX 076-229-4850
ライブラリーセンターEメール：tlib@hokuriku-u.ac.jp
北陸大学ホームページ：http://www.hokuriku-u.ac.jp/
印 刷：カンダ印刷株式会社